

# Ⅲ. パラグアイ現地研修の様子と受講者の学び

※ 現地研修の「研修報告書」を一部編集して掲載した。  
なお、訪問先の番号は、4 ページの現地行程表の番号と一致させています。

[ 7/27 (水) ]

## ① JICA パラグアイ事務所ブリーフィング

爽やかで素敵な JICA パラグアイ事務所の竹村雄一職員が、パラグアイの概要を、健康・安全面、地理、歴史、政治・経済の動向、JICA の事業に分けて説明してくれた。事前にあまり多くの情報を知らなかった私にとって興味深い話ばかりであった。首都アスンシオンは、日本から二回経由しないと着けない一番遠い首都であり、現在 Take off 中で経済成長に街が追いつかず交通事故が多発していること。面積は日本の 1.1 倍、人口は約 700 万人（埼玉県ぐらい）、海がないため都市は川沿いに発展し、三つの都市を結んだ三角形の中に人口の 90% がいること。これまでに二つの大きな戦争があり、現在の社会構造に影響していること。そして、約 5,800 人の日系人社会が存在し、今年移住 80 周年であること。JICA からは技術協力、有償資金協力、無償資金協力の 3 スキームによる支援がされていることなど多岐にわたる。とても分かりやすく惹きつけられる竹村さんの話に全員感激し、あっという間の 1 時間半となった。その国を知る上で、地理や歴史、政治・経済について知ることの大切さを実感した。（笹ヶ瀬菜生）

[ 7/27 (水) ]

## ② 青年海外協力隊（障害児・者支援）活動



パラグアイで訪問した最初の教育機関が、サン・ミゲル特殊教育センターであった。私たちが到着すると多くの先生方や子ども達が歓迎してくれた。昨年から派遣されている青年海外協力隊の渡辺真理子さんが明るく子ども達に呼びかけ、子ども達に人気の「picky picky」という曲でダンスをして交流を行った。はじめは照れていた子ども達ともすぐに打ち解け、一緒に青空の下で元気いっぱい体を動かすことで私たちも元気をもらった瞬間であった。子ども達は素直で明るく好奇心旺盛で、どの国でも子どもたちにはすごい力があることを実感した。パラグアイではまだ特別支援教育が十分でないことから、開校から今日に至るまでにたくさんの努力があったと校長先生が話してくださった。特別支援教育に対する教員の専門知識を高めることや、学びの環境づくりなど課題点も学ぶことができた。今後のパラグアイの特別支援教育がどのように変化していくのかをますます知りたくなった。（清水歩美）

[ 7/27 (水) ]

## ③ 青年海外協力隊（柔道／バドミントン／レスリング／ウェットリフティング）活動

予定より早くスポーツ庁訓練センターに着いた私達は、センター内を少し見学することにした。センター全体は公園のようになっていて、ジョギングをしている人で溢れていた。陸上競技場では小学生対

象の陸上教室が行われたり、地元の学生が競技練習に取り組んだりしている。筋力トレーニングルームやフットサルコートなど、新しい設備も多く整っている印象だ。とても賑わっているので無料開放されているのかと思ったら、使用料を支払って利用する仕組みで、富裕層の人々が利用しているという。青年海外協力隊4名の方との面会中、私は、柔道の指導者として活動している松本さんに話を伺った。今年のリオデジャネイロオリンピック出場を目指して取り組んできた活動だったが、予算の事情でその夢が叶わず落胆したという。しかし、今はジュニアオリンピック出場という目標があり、「今度こそは…」と熱く語ってくれた。青年海外協力隊の皆さんの活動にはたくさんの苦勞があり、本当にいつも頭が下がる思いだ。それでも慣れぬ地で踏ん張っていられるのは、彼らに大切な「夢」があるからだと感じた。(田原浩美)



[ 7/28 (木) ]

#### ④地域と歩む学校づくり支援プロジェクト

コロンネル・オビエド市にある教員養成校へ。パラグアイで教師になるまでの過程として、教員養成校で3年間学ぶことが義務化されている。参観させて頂いた教室では、教師を目指している学生がエクセルの使い方を学んでいた。プロジェクターはスペインからの援助であり、それを見ながら学生達は意欲的に表計算に取り組んでいた。パソコンも1人1台、DELLの比較的新しいものを使っており、「開発途上国?」という自分の先入観とのズレに気付いた場面であった。教師の方々との意見交換会では、教師として大切にしていることとして「計画をもつこと」をあげられていた。文化は違えど、どこの国でも変わらない、教育をする上で大切なことであるなど認識することができた。また、弁護士や医者など、専門職に就きながらも教職の資格を取ろうとする若者とも出会い、彼女達から「自分の技術を役に立てたい」という言葉を聞いたときは、素直に「かっこいい!応援したい!」と感じることができた交流であった。(村田義剛)



[ 7/29 (金) ]

#### ⑤イグアス湖流域総合管理体制強化プロジェクト

イグアス湖流域総合管理体制強化プロジェクトは、パラグアイで主となる水力発電による電力の供給と周辺の自然環境を守っていくという、持続可能な未来を目指す取り組みである。そのプロジェクトの一環で、パラグアイ国電力公社 ANDE と連携し、環境保全型農業の実践に取り組むモデル農家のシシリアさん一家を訪ねた。シシリアさんは環境保全を積極的に進め、持続可能な未来をつくっていくことに大変熱い情熱をもった方だった。不可能と言われた無農薬のいちご栽培に成功するなど、環境保全は知恵と工夫次第で実現可能であることを実際に示していた。このプロジェクトは、新しい価値観を提唱していくパラダイムシフト型のプロジェクトと呼ばれている。これま



での世界の経済発展の在り方は、決して持続可能なものとは言えなかった。今まさに経済発展を遂げようとしているパラグアイは、未来のための新しい経済発展の仕方を世界に提唱することができるのではないかと感じた。(油浅重里)

[ 7/29 (金) ]

## ⑥イグアス日本人会

移動中のバスの車窓から「夢いっぱい元気にはばたこう イグアス会」という看板を目にした。日本語で書かれたその看板にはどんな想いがあるのだろうと考えながら、パラグアイ生活3日目となるこの日、イグアス日本人会を訪問した。日本人がパラグアイへ移住して、今年で80周年。イグアス市への移住は今年で55年になり、現在市内には750人の日本人・日系人が暮らしている。到着すると、比嘉会長や福井顧問が出迎えてくれ、日本人会としての活動やパラグアイに暮らす日系人としての想いを話してくださった。東日本大震災の時には被災地へ「豆腐百万丁支援」を行い、目標に向かって日本人会で団結して活動されたことも伺った。さまざまな話を聞く中で特に印象に残っているのは、「今のような普通の服を着ていられるのは日系を受け入れてくれるパラグアイ人のおかげ」という言葉だ。移民から55年の間にさまざまな苦労があったことも教えて頂き、今日本人・日系人が安心して生活できることの裏には移住当時の先人たちの努力があったことを実感した。その日の朝に見た看板の文字に隠された想いが分かった気がした。(清水歩美)



[ 7/30 (土) ]

## ⑦イグアス日本語学校

福岡旅館から10分ほど石畳の道を歩いて学校へ。小学部・中学部・高等部の子供が通っていて、家で日本語を話すかによって、国語コースとラパーチョコースに分かれていた。全校生徒が集まる朝礼、教室の掲示物、図書館、放課後の掃除、終礼と、日本の学校と全く同じだった。地球の裏側でこんなにも日本を感じられたのは、日本文化を大切に守っている日系人の方々の努力のおかげである。中には、日本風の躰のためにこの学校に入学させる人がいるぐらい、保護者と地域のサポート体制は手厚い。子供たちは一生懸命勉強し、日本語能力検定試験を受けて日本に留学できることを目標にしている。私は高等部の生徒と交流の時間を持ち、パラグアイの学校事情や彼らの大切なものを聞いた。「家族」と真っ先に書き、笑顔で写真に納まる姿は、日本の高校生と変わらないなと感じた。子供からたくさんのパワーをもらった訪問だった。(市江文奈)



[ 7/30 (土) ]

## ⑧モンダウの滝

観光地化が進んでいないパラグアイに来て、初めて観光地らしい場所を訪れた。それが、モンダウの滝である。パラグアイ東部の中心都市、首都アスンシオンに次ぐ都市であるシウダ・デル・エステ市が

ら約3キロの場所にある。入場券を買って中に入ると、森林浴ができそうな散歩道が伸びていた。木々が植えられ、置物が置かれた庭を通りすぎると、モンダウの滝を望む展望台へと続く階段がある。そこには、銃をもった警備員が厳しい顔で立っていて、物々しい雰囲気が漂っていた。パラグアイでは、銃犯罪も起こると聞いている。研修中も様々な場所で、銃を持った警察や警備員に出会った。温かい穏やかなパラグアイ人としてしか会っていない私は、厳戒態勢を目の当たりにし、そのような危険もあることを思い出した。階段を下りると眼下に広がるのは、迫力満点のモンダウの滝。落差40メートルで何段にも分かれて落ちる水量は膨大である。滝は透明度が高くきれいで、水しぶきが展望台にいる私たちにまで届いた。太陽の光が美しく反射し、大きな虹もかかっていた。さらに滝の勢いを感じたくて、エレベーターに乗って滝つぼに行こうとすると、そこは別料金。観光地化が進んでも、自然を大切に共生する意識が残って行くことを願う。(児玉やこ)



[ 7/30 (土) ~ 7/31 (日) ]

## ⑨パラグアイ人宅でのホームステイ



私のステイ先アリミンダさんのお宅は、広大な敷地を利用して放牧や大豆の栽培を行っている。敬虔なクリスチャンであるご家族は、その日教会の神父さまのお誕生日会があるということで、私も同伴させていただいた。そこで行われていた会がとても印象的だったので、ここに紹介したい。多くの家族が集い、パーティが始まると、MCからある紙袋が示され、ここにプレゼントを詰め込んでいくというのだ。その袋をリレー形式で

「この中で最も〇〇な人(例えば、優しいひと、親切な人、美しい人など)」を選び、手渡していく。でも一向に袋には誰も何も入れない。「〇〇な人」と指名する相手は、自分の家族であったり、そのコミュニティの重要な人物だったり、皆が敬愛する人であった。リレーが進み、その袋が誕生日である神父さまに渡ると、そのようなみんながあなたの誕生日をお祝いしているのだという趣旨の言葉をMCが述べて、みんなで拍手。別に用意された袋一杯のチョコレートを、神父さまが子供たちにプレゼントし会はお開きとなった。心温まる、素敵な会に参加できたことに感謝している。(安藤理恵)



最初、英語の通じない家庭でホームステイなんてどうしようと不安だった。パラグアイに着いてから、言葉の通じない不安を学生以来久しぶりに感じていた。到着してすぐ、お母さんと庭先で会話。たくさん話をしてくれるのに殆ど理解できなくてとても悔しくて悲しくて、このままじゃ飽きられてしまうと不安になった。でも、お母さんは笑顔でずっと話しかけてくれた。その心の広さは、今振り返ると尊敬に値するぐらい感謝している

る。お父さんはパン工場を経営しており、「家族に」とお土産に大量のコキートをくれた。庭でテレレをしながらゆっくり流れる時間に癒された。大切なものを聞いたときに「家族も大事だけど、君たち2人も大事だよ。」と答えてくれた笑顔を思い出すと胸が熱くなる。しっかりもののお姉ちゃん、私のつ

たないスペイン語をいつも笑顔で聞いてくれた。遊び盛りの妹ちゃん、お父さんに大切なものを聞いているとき絵を描き始めたなと思ったら、私たち2人を描いてくれていて、思わず抱きしめた。言葉に頼らなくても、心で通じ合えると改めて気づかされたし、ミルタさん一家が帰り際悲しんで涙を流してくれる姿に、パラグアイ人の温かさ、ホスピタリティーに深く感謝した。(市江文奈)



ホームステイでは、「人とのつながり」と「自然とのつながり」について印象に残った。ママは、私たちが困らないように、言葉が通じない中で試行錯誤しながらコミュニケーションを取ってくれた。初めて会った人も、家族も、近所の人も、目の前にいる人全てを大切にすることが当たり前になっている。隣に住む娘家族も合流し家族そろって食事したり、ママの友達が家族の一員となって食事をしたりすることもあった。また、近所同士の行き来も頻繁で、地域で助け合い、近所に住んでいる子どもは町の皆で面倒を見ていた。年上の子は年下の子の面倒を見て、本当の兄弟のように一緒に遊び育つ様子を見て、「人のつながり」が強く温かい家族や地域の人間関係を日本も見習いたい。「自然とのつながり」は、食事のたびに感じた。家には冷蔵庫2台、大きな冷凍庫が1台あり、さまざまな肉(牛・鹿・やぎ・鶏・羊など)が保管してある。冷凍庫にある肉はほとんどが庭で飼育した命である。また、畑でとれたハーブ、唐辛子、ねぎ、レモンなどを料理に使ったり、庭のマンゴーやバナナなどの果物を食べたりする。主食のマンディオカも、庭の畑で育てていた。「自然の命をいただく」生活は大変貴重な経験となった。(児玉やこ)



とうとうホームステイの日、緊張とうれしさ半々。両親と3人兄弟のご家族、スペイン語とグアラニー語での会話だ。私たちの下手なスペイン語の単語から行間をよんで理解してくれたり、身振り手振りで何とか伝えようとしてくれたりした。家族全員で食べた昼食は、とても心あたたまる時間だった。お父さんが朝から焼いてくれたお肉、お母さんお手製の Pasta がおいしかっただけでなく、心からのおもてなしとみんなの笑顔に胸がいっぱいになった。その後も、庭でゆったりとテレレを飲みながら過ごした時間はほっとする優しい時間で、忙しさに忘れてしまっていた時間だった。言葉は分からなくても、伝えることを諦めずに、伝えたいという思いをもって伝えようとするれば、気持ちは伝わると知った。こちらが笑顔でいると、相手も笑ってくれた。見知らぬ日本人を招いてくれて、帰り際目を赤くして送ってくれたお父さんや、「私の娘」と言ってくれたお母さん、自分の時間も大切だろうにずっと一緒に過ごして笑っていてくれた兄弟がいた。ありがとうの思いを精一杯伝えた。ホームステイができて、カバジェロ・ベルナルダさん家族に出会えて本当によかった。幸せをもらった。(笹ヶ瀬菜生)

[ 8/1 (月) ]

## ⑩青年海外協力隊 (看護師) 活動

パラシオ・デ・フスティシア保健ポストでは、看護師として派遣された青年海外協力隊の大原育子さんにお話を伺った。医療に携わる人の数が少なく、設備も整っていないビジャ・リカ市で、どのような活動ができるか懸命に模索されている大原さんの様子を感じた。その後のドン・ボスコ・サレシアノ高

校では、大原さんの講義を私たちも後ろで見学させてもらった。中絶が認められていないパラグアイではシングルマザーも多く、それが貧困問題の原因の一つになっている。宗教上のことも配慮しながら、伝えられる範囲で妊娠について学生たちに話し、男女ともに生命の大切さについて考えるきっかけを与えていた。少し恥ずかしがりながらも、真剣に考える学生たちの姿がとても印象的である。講義のあとの交流では、校庭に集まり全員で「だるまさんがころんだ」をした。高校生と全力でする「だるまさんがころんだ」はとてもおもしろく、無邪気な学生たちと素敵な交流ができた。(清水歩美)



[ 8/1 (月) ]

## ⑪青年海外協力隊 (小学校教諭) 活動

粗い石畳の道を馬車が走るイタクルビ市内、坂の途中に現れた小さな門がメルセデス・ミルトス小学校の入り口だった。傾斜のある土地に建った校舎は段違いになっており、複雑な形をしている。先生方にパラグアイの子どもの良さを伺うと、自由な発想と前向きな姿勢があることだという。確かに、子ども達と交流をすると、皆熱心に取り組んでいた。その中に一人、両手指がまひしている児童がいた。彼女は誰の助けもなくペンを持って絵を描き、自信に溢れた表情で見せてくれた。彼女の夢はライターで、読み書きもクラスで一番良くできるという。近年、パラグアイではインクルーシブ教育に関して法律が定められ、障害を理由に入学を拒否した場合は罰則があるそうだ。しかし、教員は特別支援についての知識がほぼなく、教育機関に相談しても「わからない」という返答があるだけ。特に困り感がないこちらの小学校では、今後、特別支援学級を閉鎖する予定だという。障害のある児童が皆、ここで出会った少女のような強いパーソナリティをもっていれば良いが…誰もが充実した日々を過ごせる街になることを期待したい。(田原浩美)



[ 8/2 (火) ]

## ⑫ニヤンドゥティ工房

イタウグア市内にある宿泊先から歩いてニヤンドゥティ工房へ。その道中、ニヤンドゥティを多く取りそろえているお店に立ち寄り、私たちは大興奮しながら、繊細で、かわいらしいパラグアイの伝統工芸品「ニヤンドゥティ」を購入した。小さいものだと100円弱で買うことができ、その安さに驚いた。ニヤンドゥティ工房はビルのような建物の中にあり、そこでは工房だけでなく、商品の販売、ニヤンドゥティ作りの講座なども開かれているようだった。作り方のDVDを見させてもらったが、その一つ一つが繊細で、小さなものでも労力と時間を使うものであることがわかった。「こんな大変な作業に100円でいいの?」という購入者としての自分の思いは複雑であった。日本では伝統工芸品がブランド化され、比較的高価に取引されている



ものもある。このニャンドゥティもそのようなビジネスモデルを参考にして、生産者までお金が届くシステムが根付いてほしいと思う。(村田義剛)

[ 8/2 (火) ]

### ⑬小規模ゴマ栽培農家支援のための優良種子生産強化プロジェクト

小規模ゴマ栽培農家支援のための優良種子生産強化プロジェクトは、小規模農家に向けた質のよい種子の安定的な供給や、栽培技術の向上を目的とした取り組みである。パラグアイで栽培されるごまの大半は日本への輸出向けであるが、ゴマのようなマイナー作物の先進国への輸出は、クリアしなければならない課題がいくつかある。そのうちの1つが、食品の安全性に関する問題である。農家に向けた指導はもちろんのこと、パラグアイにおける食品の安全管理のための検査基準をつくっていくことも、このプロジェクトの大きな目的である。パラグアイにおいて、食品の高い安全性や品質におけるニーズは現時点では少ない。そのため、安全性や品質に高い関心がある日本のような先進国との間にギャップがあり、様々な問題が生じるのである。国の仕組みそのものを変えていくこのプロジェクトは、これから経済発展をしようとするパラグアイにとっても、輸入国である日本にとっても、大変意味深いものであると感じた。(油浅重里)



[ 8/2 (火) ]

### ⑭白沢商工株式会社

白沢商工株式会社白沢社長の、「パラグアイの人々を貧困から救いたい。」という言葉が、パラグアイの中での日系人の生き方を表していると感じた。「我々だけが、利益を得てはダメだ。周りのパラグアイ人は小農で貧しい。」その貧困対策は、国連のモデルにもなったほどである。彼の企業哲学ともいえる、「人のための企業は間違わない。人のためにある企業は広がっていく。」は非常に深い意味をもっている。また、彼は外国に出たがらない近年の日本の若者に対して、「外に出て日本を見ると日本が好きになる。便利過ぎないところで得る経験はたくましさを生む。」とメッセージをくれた。生徒にぜひ伝えたい。そして、「立場を尊重して、自分から積極的に入って行く。片隅にいて、静かにしていれば呼ばれないのだ。」という姿勢を自分も実践していきたい。(安藤理恵)



[ 8/3 (水) ]

### ⑮シニア海外ボランティア (電気・電子機器) 活動

バスで到着すると、校長先生をはじめ多くの先生が私たちを出迎えてくれた。麦わら帽子と扇子、交流会場には「ようこそ いらっしやいませ」の文字と、パラグアイと日本の国旗。先生方のありったけのおもてなしに感動！ここでは、30年以上前日本から持ってきた機械を大事に使って、建築、自動車工学、溶接など様々な工業・電子分野の勉強をする学生がいた。また、シニア海外ボランティア

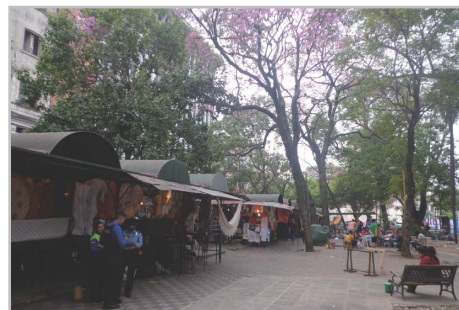
の方が3名活躍されていて、専門性高い授業を通して日本の技術を学生たちに教えていた。各科を見学後、学生と交流の時間がもてた。将来の夢を聞いたら、ある学生が、「私は仕事をして、家族だけでなく多くの人を幸せにしたい。」と書いてくれた。彼女のまっすぐな気持ちに心打たれた。交流も終わりの時間に差し掛かった時、ある男の子が「先生の笑顔がとても印象的だ」と言ってくれた。その言葉がとても嬉しく、笑顔は言葉を超える！と改めて気づかされた。(市江文奈)



[ 8/3(水) ]

## ⑩ アスンシオン市内見学・教材収集

パラグアイの首都、アスンシオンは街中にピンクや白、黄色の花を咲かせるラパーチョをはじめ、木が多く植えられている。その木々と建物の間から見える空は青く、心地いい風が吹いていた。教材収集のために訪れたコロン通りは、民芸品のお店や露店が並ぶ。先住民の方は、マラカスや笛などの楽器類、カラフルなブレスレットやカバンなどの民芸品を販売していた。また、テレレを飲むための水筒(テルモ)やコップ(グアンパ)、ストロー(ボンビージャ)が並ぶ露店も見かけた。銀細工やグアラニー民族衣装、革製品なども多く売られている。お店の人は質問をすると商品の説明を丁寧にしてくれた。基本的には商品を勧めてくることもなく、自由に商品を見る私たちを笑顔で見守ってくれた。優しい店主のおかげでとても快適に買い物をする事ができた。途中で立ち寄った大統領府は大変立派で美しい建物で、厳重な警備がされていた。外観に見とれていたが、直前に車窓から見たスラム街が頭に浮かび、貧困や格差の問題が根強く残っていることを実感した。街中は、交通量も人の往来も多かった。日本でおなじみのファストフード店や、パラグアイの料理のエンパナーダやチパのファストフード店が並んでいた。(児玉やこ)



[ 8/3(水) ]

## ⑪ 在パラグアイ日本大使館

大使館表敬では、パラグアイで印象に残っていることを1人ずつ話すこととなっていた。パラグアイに来て初めてブレザーを着て、在パラグアイ日本大使館へ。JICA東北チームと合流後、大使館の門をくぐった。それぞれが一晩かけて考えてきたことを、緊張しながらも自分の言葉で伝えることができた。上田善久パラグアイ共和国駐箚特命全権大使は、一人一人の顔を見ながら、丁寧に話を聞いてくださった。また、JICA東北のメンバーとは、訪問場所や感じたこと考えたことが異なり、話を聞くことで新たな見方や考え方を知ることができた。大使館には茶室や松の木があり、日本庭園の池にはコイが泳いでいた。一方で、マンゴーの木があり、パラグアイの伝統工芸ニャンドゥティが飾られ、日本とパラグアイどちらの自然や文化も大切にされていた。日本ではあまり知られていないが、パラグアイと日本には深いつながりがあること、そして、パラグアイで得た経験を、日本で多くの人に伝えてほしい、という上田大使のお言葉をしっかりと実行していきたいと思う。(笹ヶ瀬菜生)



[ 8/3 (水) ]

## ⑱ JICA パラグアイ事務所関係者&JICA 東北受講者との懇親会



パラグアイの地で、多くの JICA 関係者の方々とお会いできるということでこの懇親会をとっても楽しみにしていた。会場となるレストランで、チパヤソパ・パラグアージャ（固形スープ）、迫力満点のお肉、デザートなどのおいしいパラグアイ料理を食べながら、近くの人たちといろんな話げができた。アルパ演奏（パラグアイのハーブ）やボトルダンスなどもあって、会場は大盛り上がり。大きめの声じゃないと、隣の人と会話できないというくらいで、とてものにぎやかで楽しいひと時だった。青年海外協力隊やシニア海外ボランティア、JICA 東北の教師海外研修受講者の方々、パラグアイの生活のことや今の日本の出来事のことなどを話す時間がたくさんあった。「パラグアイの食生活や時間の感覚に慣れるまでは時間がかかったけど、それもパラグアイの魅力。残りの時間を大事にしたい。」と話す方も何人かいて、パラグアイの魅力を改めて知ることができてなんだか嬉しく感じた。（清水歩美）

[ 8/4 (木) ]

## ⑲ JICA パラグアイ事務所報告会



日本への帰国日、私たちは JICA パラグアイ事務所での今回の教師海外研修の振り返りを行った。竹村雄一職員に向けて 1 人 1 人が研修全体を通して感じたことや学んだことを報告し、全体で思いを共有した。1 人 1 人の視点や感じたことは異なるが、全員に共通していたのは、この研修を通して多くのことを感じ、学び、考え、自分自身に何らかの変化があったということである。それぞれが学びを語る姿を見て、受講者 1 人 1 人が熱い思いをもって今回の研修に参加したことを改めて感じ、「体感」することの重要性を再認識した。世界共通の幸せを考えたときの基準となる SDGs は、今後地球に暮らす私たち全員が目指していくべき目標である。この目標を達成していくために教師としての私たちにできることは、自分自身がよりよい未来について考え、学び続けること、そして子どもたちにその重要性を伝えていくことだと思う。パラグアイでの教師海外研修を受け入れて下さった吉田英之所長、竹村雄一職員には、改めて感謝の気持ちをお伝えしたい。（油浅重里）

[ 8/4 (木) ]

## ⑳ ランパレの丘

パラグアイ滞在最終日。アスンシオンの外れにあるランパレの丘へ行った。そこからはアスンシオン市内が一望でき、住宅街や高層ビル、至る所にピンク色に染まったラパーチョが咲き誇っている絶景スポットであった。しかし、川沿いにバラックのような集落群が。そこはパラグアイで最貧困地区といわれているカテウラ地区。その周辺までバスで見学することができたが、降りるのは危険なので禁止。車内からの見学をさせてもらった。ここまでパラグアイに来て、「貧困」というものを感じたことがない。

そのくらいパラグアイは発展を続けている。しかし、私たちが見たものは、舗装されていない道。下水処理がままならず、緑色になった排水。ゴミだらけの道ばた。この光景を見ずにパラグアイを語ることはできなかったと思う。世の中にはいろいろな違いがあり、それを多様性というが、私たちが見てきたパラグアイと今見ているパラグアイの違いは無くさなければならぬものであると思った。(村田義剛)



[ 全般 ]

## ● パラグアイでの食事

パラグアイで食べた食事約 26 回の内訳を振り返ると、日本食 11 回、パラグアイ料理 11 回、洋食 4 回であった。パラグアイ到着後、初の朝食はホテルでの日本食ビュッフェであり、全員が驚いた。まさか、地球の反対側で日本食を食べられるとは思っていなかった。しかし、それは序の口であった。てんぷらうどん、すき焼き、やきそば、ラーメン、納豆、漬物、白米、味噌汁、煮物…これぞ日本食というものをたくさん食べた。初めは驚いていたが、徐々にこれがパラグアイの文化の一つなのだと感じるようになってきた。パラグアイでは日系社会が共存し、日本食の伝統も守られてきたのだと思った。一方、パラグアイ料理では、アサード(焼肉)のおいしさに目から鱗であった。肉に岩塩を振りかけ、炭火焼にしたものだ。主食はチパというチーズ入りのパン、キャッサバ、トウモロコシを使って作られるソパ・パラグアージャなどである。おいしくいただいた。野菜はあまり食べられてこなかったそうで、その分のミネラルやビタミンは、常に飲むマテ茶で賄われてきたという。茶器セットと水筒はどこへ行くにも必携だ。冷水で入れたお茶は特にテレレと言い、このお茶の文化はパラグアイを語る上で欠かせないと感じた。(笹ヶ瀬菜生)

